

小中双方の良い点を取り入れ 「ギャップ」を「ステップ」に変える

2010年度から小中一貫教育を進めている宇都宮市立西原小学校と宇都宮市立一条中学校。

取り組みを通じて双方の学校の様子を見る中で、小学校と中学校の間に存在していた大きなギャップに気づき、小さなステップに変えていく必要性を感じたという。

●小中の円滑な接続が必要な理由

学習面のつまづきを

小中の教師で共有したい

——宇都宮市では、市全体で小中一貫教育に取り組んでいるとうかがいました。どのような内容なのでしょうか。

久保 宇都宮市では、2012年度から全ての公立小・中学校を25の「地域学校園」に分け、各学校園で小中一貫教育を進めます。私たちの一条地域学校園（宇都宮市立一条中学校、宇都宮市立西原小学校、他2校の小学校）は、モデル学校園として10年度に先行して取り組みを始めました。高野校長とは、この2年間、一緒に取り組みを進めてきました。

高野

本校は05年度から3年間、文部科学省から学力向上拠点形成事業研究校の指定を受け、その一環として一条中学校との連携に取り組みました。連携の目的は、学力の向上と教師相互の理解を通して、中一ギャップを軽減し、小中の円滑な接続を目指すことでした。特に、国語と算数の指導内容では、小中に共通した課題について重点化を図るために、年間計画に位置付けたり、教師の授業交流を行ったりしてきました。これらの蓄積を基に、10年度から本格的に一貫教育に取り組み始めました。

——読者の先生方は、小中接続の難しさを感じているようです（図1）。貴学校園では小学校と中学校の接続において、どのような課

図1 小中接続における難しさ

- 「授業を見る」だけで、小学校も中学校も変わろうとしない。交流のビジョンが不明確
- 授業を見合うためには、互いの学校の距離や時程表などが気になる。日程調整だけでも難しい
- 小中どちらも、教師が接続の必要性に迫られていないことが、一番の問題点
- 最も必要なことは、教師の意識の高まり。危機感や必要性を感じない教師が何度交流をしても、深まりはない
- 形式的な交流を図ることなら、さほど難しいことではない。しかし、内容面で見ると、これでよいのかと思うことが多々ある

題があつたのでしようか。円滑な接続が必要だと思つた背景をお話ください。

久保 子どもが成長していく上で、ある程度のギャップは必要だと思えます。しかし、これまででは、小学校を卒業した子どもにとって、学習面でも生活面でも小学校と中学校の間の段差が大きすぎたのではないでしようか。子どもが少し頑張れば乗り越えられるようなステップにしなければならぬと感じていました。

高野 小・中学校の教師が授業交流をする上では、日程の調整が難しく、具体的な内容などを話し合う時間の確保、段差が大きく子どもがつまづきやすい学習内容の指導のあり方まで踏み込んだ話し合いが十分に出来ていな

小中接続——子どもの学びを中学校へつなく

栃木県宇都宮市立西原小学校

高野恵子 校長

たかの・けいこ◎宇都宮市立小学校教諭、宇都宮大への内地留学、算数教科指導員などを経て、現職。
宇都宮市立西原小学校◎「心豊かでたくましく、みんな育てみんな育て育つ地域の学校づくり」を学校経営理念とし、地域と一体となった教育を目指す。児童数は291人。



栃木県宇都宮市立一条中学校

久保徹 校長

くぼ・とおる◎宇都宮市立中学校教諭、宇都宮市教育委員会指導主事、宇都宮市教育センター所長などを経て、現職。
宇都宮市立一条中学校◎「楽しい学校づくり」のための一要素として学力向上を重視し、「授業に真剣に取り組もう」の5項目に徹底して取り組む。生徒数は424人。

かったことが挙げられると思います。子どもが苦手意識を持ちやすい学習内容については、スモールステップで徐々に理解できるような過程や工夫があるとよいと感じます。

久保 小学校で、ある部分につまずいたまま中学校に進学してくる場合も、学びを積み重ねていくことが難しくなってしまう。

高野 その通りだと思います。算数の例ですが、小学校では5年生から内容が難しくなり、「単位量あたりの大きさ」「比例・反比例」などでつまずく子どもがよく見られます。そのままの状態で中学1年生になると、小学校でのつまずきを負の数や文字式が出てくることへの戸惑いも加わり、一次関数への苦手意識が強くなる生徒が多いと感じました。子どもが中学校入学後につまずきやすい部分は、小学校時代に重点的に身に付けさせておきたい、そのためには、子どもがどこでつまずくのかを、小・中学校の教師が一緒に洗い出し、共有したいと考えるようになりました。

久保 同感です。これまでは、小・中学校の教師が互いの学習内容や子どもの様子を、十分に理解しているとは言い難い状況でした。

この課題へのアプローチとして、私たちの学校園では、中学校の教師が3校の小学校で指導する乗り入れ授業を、国語、算数、外国語活動でそれぞれ年2回ずつ実施し、一方、小学校の教師はT2として中学校の授業に参加しています。また、互いの授業研究会に参

加し、意見し合うことも始めました。小学校の先生は、中学校の先生とは異なる視点で授業を見て意見を言ってくださるので、いろいろな発見があります。各教科において小・中学校の教師が学びのつながりを理解することで、つまずきへの手立てを共に考えるなど、スムーズな接続が可能になっていくと考えています。

高野 これまでも、中学校でのつまずきを少なくするために、限られた授業時間の中で指導を重点化したり、授業で学んだことを日常的に活用する機会を増やしたりすることは必要だと考えてきました。しかし、小学校で完結している意識や、中学校での学習の土台となる指導の重点が抜けてしまっていた部分があり、どこかにあったかもしれない、と反省しました。中学校の学習とのつながりをもっと考える必要性を感じました。

久保 小学校と同じような学習を中学校で繰り返すことがなく、その上に学びを積み上げられるように、中学校が小学校での指導内容を知っておくことも大切です。例えば、英語のゲーム活動などは小学校でたくさん行っているのに、中学校ではそれを踏まえた活動を取り入れられるようにすることが必要です。

小中で共通化できる部分を積極的に取り入れる

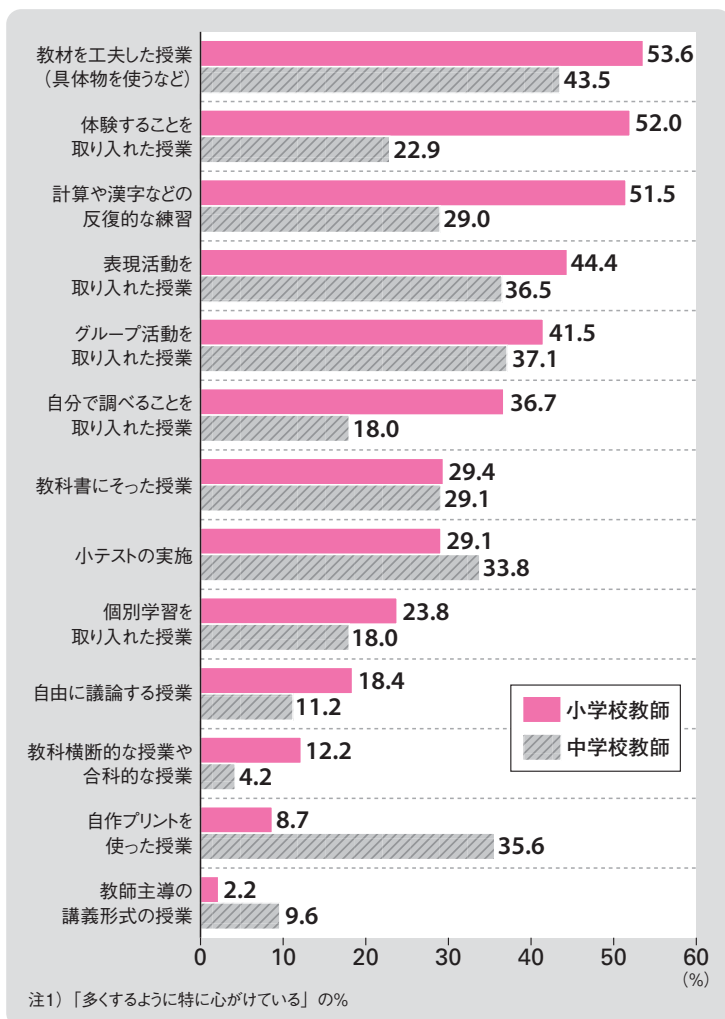
高野 小・中学校では、学習方法、特に授

業の進め方も大きく違うと感じます(図2)。中学校の授業を参観して、生徒が静かに先生の話を聞いて黙々と学習している様子や、先生方が1時間の授業内容をきっちり指導していることに、小中の文化の違いを見た思いがしました。ただ、「小学校であれだけコミュニケーションを取れるように育ててきたので、中学校であればもっと積極的な討論があってもよいのではないか」と感じたこともあります。

久保 小学校の授業を見ると、子どもがきちんと挙手や返事をしたり、「○○です。その理由は○○です」などと上手に説明したりする姿に驚かされます。中学校の授業は教師が主導する場面が多く、発達段階からも、中学生に活発に発言させることはなかなか難しいものがあります。中学校の教師が小学校の良さを理解し、その良いところを取り入れた授業をすることが必要でしょう。

高野 小学校は1年生を基準にどう育てるかを考えるのに対し、中学校は3年生での高校受験を目標として子どもの姿を考えることが多いように思います。そう考えると、小・中学校で指導が異なる部分があるのは当然だと思えます。ただ、学習や生活の面で共通のルールのようなものをつくったり、小学校高学年では少しずつ子どもの自主性に任せる指導を取り入れたりすれば、何もかもが新しいことにはならず、子どもの不安を軽減できるので

図2 小・中学校の教師がそれぞれ心がけている指導



はないかと思えます。

久保 学習環境についても、小学校から学ぶことがたくさんあります。中学校は小学校に比べるとどうしても殺風景になりがちですが、小学校の掲示物の充実ぶりを見て、多くの先生が掲示に工夫をするようになりました。教科担任制や定期考査、教師の子どもに対する姿勢など、中学生になると変わることはありませんが、共通化できる部分、どちらにも取り入れると良い部分は、積極的に取り入れることが大切だと思います。これを学校園全体で共通理解の下に進めていけば、複数の

小学校から中学校に進学してくる場合でもスムーズに指導を始められます。

高野 子どもの不安を軽減するためにも、中接続を円滑にすることは必要です。以前は、中学校に対する小学生の不安は大きく、「勉強が難しくなるのでは」「先輩が怖いのでは」「部活動は厳しいのでは」といった声がよく聞かれました。これは当たり前前で、大人でも経験したことのない世界に入っていく時には、強い不安を感じるものです。しかし、中学校の内実がよく分かれば、不安は「期待」に変わります。

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

久保 私たちの学校園で、小学生が中学生に親しむ上で効果を発揮しているのは、「あいさつ運動」です。これは、毎月1回、通学時に中学校の教師や生徒が小学校の校門に立ってあいさつをする活動です。乗り入れ授業で中学校の教師が小学校を訪問する活動もそうですが、実際に中学校の教師や生徒に会い、人間関係が出来ることで、子どもは慣れ、中学校への不安が和らぎます。

高野 6年生の中学校訪問も効果的です。中学校の文化祭や合唱コンクールを見学し、中学生の素晴らしい歌声などを目の当たりにしたことで、中学生への憧れが非常に強まりました。

●小中接続の土台をつくるために

**言いたかった意見や疑問を
校長が伝え合うことから始める**

現在は、さまざまな取り組みをされていますが、小中一貫教育の必要性は、最初から先生方に浸透していたのでしょうか。

高野 必ずしも初めから積極的に取り組んでいたとは言えない部分もありました。しかし、小中の交流を通じて、互いの様子が見えるようになったり、子どもにとつての効果が見えるようになったりしたことで、多くの先生方が主体的にかかわるようになってきたと感じています。

久保 当初は、小学校と中学校とでそれぞれ

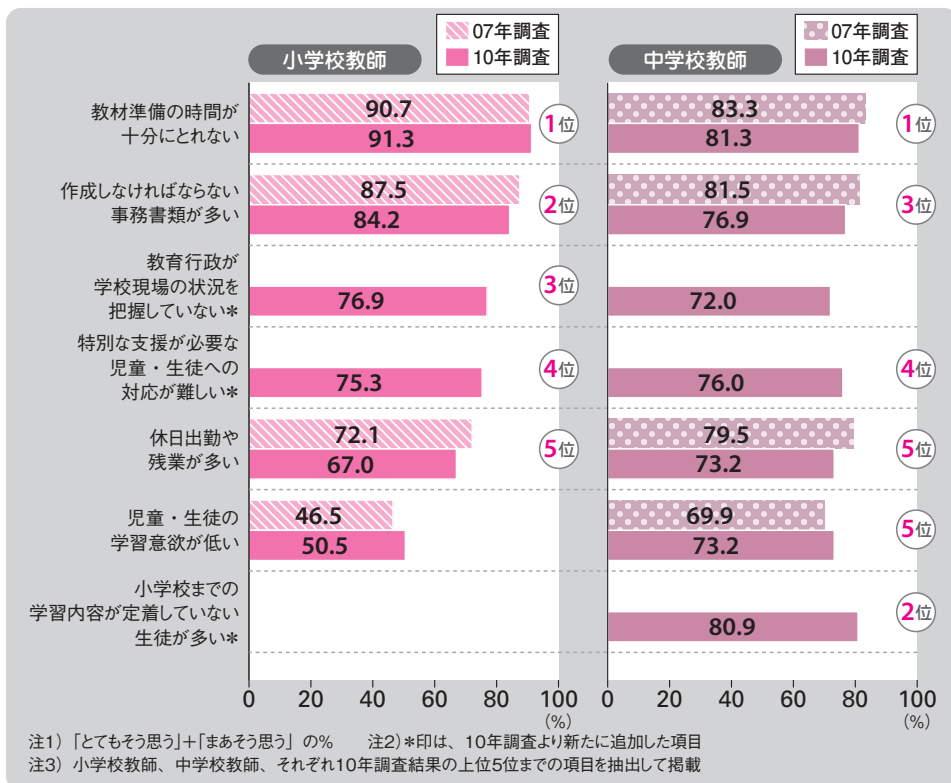
の主張がありました。しかし、互いに言いたかったこと、疑問に思っていたことを、まずは校長同士が伝え合うことから始めました。小中の先生方が一枚岩になれるかどうか、同じ土壌に立てるかどうかが何より大切です。1年目は大変なこともありましたが、2年くらいは基盤づくりの期間として捉える必要があると思います。

高野 組織としては、「学習」「生活」「健康・体力」「交流連携」の4つの部会を設けています。学校の取り組みの初年度は、年間行事に小中一貫の予定を組み込んでいかなかったため、会議や研修の日程を合わせるのに苦労しました。そこで、11年度は年間行事に月1回の「小中一貫の日」を組み込みました。この日

を中心として、全体会を実施したり、地域の4校を輪番で会場として各部会で話し合いを進めたりしています。4校の先生方は無理なく顔を合わせられる機会をつくることは、先生方の意識を高めるために重要だと思っています。

久保 小中合同の懇親会を開いたことでも、

図3 小・中学校教師のそれぞれの悩み



出典／Benesse 教育研究開発センター「第5回 学習指導基本調査報告書 小学校・中学校版」(2011)
調査時期は2010年8～9月、調査対象は、小学校教師2,688人、中学校教師2,827人



人間関係が深まりました。先生同士が仲良くなり、言いたいことや思ったことを言えるようになれば、双方の良い所も見え、互いに取り入れることが出来ると思います。学校段階が異なっても教師として共通する悩みはあるものです（P.7 図3）。子どもを育てるという共通目標の下、協力できる関係が築ければよいと考えています。

高野 小学校では不登校でなかった子どもが、中学校で不登校になる場合があります。

以前は、そのような情報が小学校には届かず、子どもが休み始めて随分経ってから、その事実を知ることがありました。「休み始めた後にすぐ連絡をくれれば、小学校から子どもにも働き掛けるなど何か出来たかもしれない」と感じたことがあります。

久保 中学校としては、「子どものちょっとしたつまづきを伝えてもらいたい」と、小学校に対して感じていたことがあります。一般的に不登校は中学校1年生で多いといわれますが、小学校の時に全くつまづきのなかった子どもが、中学生になって突然不登校になるケースはほとんどありません。不登校が起これるのは、小学校時代に友人関係や家庭環境など、何らかの課題を抱えていた子どもが多いのです。ちょっとしたつまづきでも小学校からあらかじめ伝えてもらえると、中学校でもその点に気を付けて指導できると思います。

高野 このように、「なぜかな」「もっとこうしてくれればよいのに」と思うことを伝え合う中で、子どもがよい形で育っていくためには、情報共有がとても大切なことを改めて感じるようになりました。子どもの情報共有は、小学校の学年間で担任が変わるだけでも引き継がれないこともあるくらい、簡単なようでも難しいことでもあります。現在本校では、一人ひとりの子どもの情報が確実に引き継がれていくように、「児童指導ファイル」を作る試みを始められています。

●成果と今後に向けて

卒業後の子どもの成長を知り 中学校とのつながりが深まる

—これまでの取り組みから見えてきた成果や課題は何でしょうか。

高野 子どもの中学校に対する不安が軽くなり、期待や憧れが膨らんできたことが一番の成果でしょう。「中学校ではこんな勉強をしたい」「この部活動に入る」など、前向きな言葉がよく聞かれるようになりました。

久保 本校では、病気や障がい、家庭に起因するものを除き、1年生の不登校が減りました。先生方が小学生の実態、中学校入学時の生徒の能力や状況への理解を深めたことが、小中の差を小さくすることにつながったのでしよう。乗り入れ授業により、小学生にとって「知っている先生が中学校にいる」状況が生まれたことも、中学校生活への溶け込みやすさにつながっているのかもしれない。

高野 教師の意識の変化も大きな成果です。アンケートでは、8割以上の先生方が「小中一貫教育の取り組みに効果を感じる」と回答しています。小学校では中学校とのつながりの中で授業を考えられるようになりました。これまでは中学校に送り出すという意識だったのが、中学校を訪れる機会が増え、卒業後の子どもの成長も見られるようになったからだと思います。

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

久保 人と人とのつながりができ、会議などでもより早く1つにまとまるようになってきました。そうになると、一層やる気が出てきますし、互いの良い所に目が向きやすくなります。この良いサイクルを続けたいと思います。

**9年間の子どもを共有し
取り組みを進めていきたい**

久保 今後は、小中9年間のカリキュラムの作成を計画しています。育てたい子ども像や各教科のつながりを見直し、9年間を通した学びを考えたいと思います。そうすれば、子どもの学びや学びへの意欲が小学校、中学校、その先へもつながると思うのです(図4)。

高野 小学校では3教科で乗り入れ授業をしてもらっていますが、これを全教科に広げられれば、相互理解がより深まるのではないかと思います。小学校では1人の担任が全教科を受け持ちますが、実験の準備の大変さなどから理科の指導を不得意とする教師もいます。以前、中学校の理科の先生に授業をしていただいた時には、子どもは先生の話に興味津々で、中学校への期待も高まったようでした。あるいは算数で、9年間のカリキュラムを基に比例・反比例など、つまずきやすい単元の指導を中学校の先生にさせていただければ、子どもの理解が深まるのではないかと期待しています。このように考えると、乗り入れ授業の時期や内容の必然性が高まります。

小学校の教師は、中学校3年間の学習内容を頭に入れた上で指導することが理想です。決して簡単なことではありませんが、9年後の子どもたちがどのような姿になっているかを全員が共有して、取り組みを進めたいと考えています。

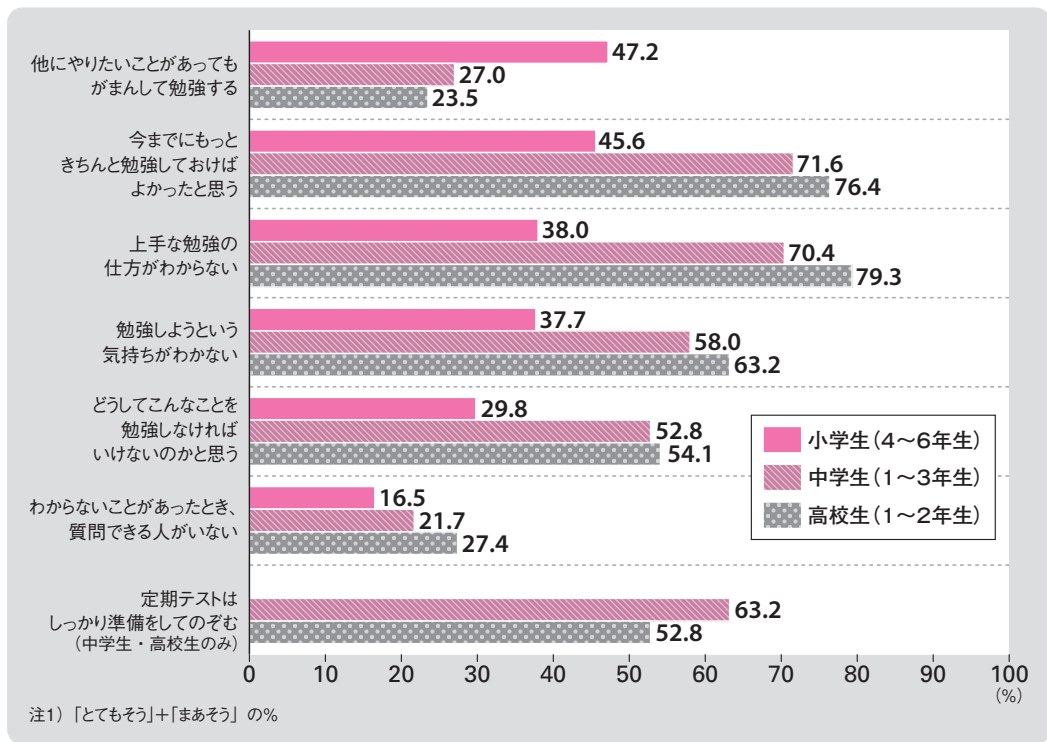
久保 中学校での乗り入れ授業では、現在は小学校の先生にT2として入ってもらっていますが、それだけではもったいないと感じています。例えば、小学校から中学校になって急に難しく感じる単元でスモールステップにするような授業をしていただけると、効果的ではないでしょうか。

思い返すと、このような具体的な課題や展望は、1年前にはまだ浮き彫りにはなっていないかもしれません。小学校と中学校がねらいを共有しながら取り組みを進め

の中で見えてきて、互いに更なるアイデアを出し合えるようになったことをうれしく思っています。これからも小・中学校の先生が同じ方向を見て進んでいきたいと思っています。

——本日はどうもありがとうございました。

図4 子どもの勉強への取り組み(学校段階別)



出典／Benesse 教育研究開発センター「第2回 子ども生活実態基本調査」
調査時期は2009年8~10月、調査対象は小学生3,561人、中学生3,917人、高校生6,319人